

私の夢は世界平和

松村 吉子さん（岡本在住）



松村吉子さん。
大正6年大阪生まれ。今年100歳になった。
長女の芳子さんと岡本の鎌倉ロジユマンで暮らし
始めて10年ほどになる。この春、自らの戦争体験
を綴った「私の夢は世界平和」を上梓した。

きっかけは2年前、通っていたリハビリ施設で行われた「夢の発表会」。利用者からそれぞれの夢を募り発表会を行う。誰もが生き生きと人生を楽しんでほしいという施設の意向で毎年開催されている。年長者だった松村さんも是非にと参加を勧められたが、当初はそう言われても夢なんて、と戸惑ったそうだ。そんな折、新聞の記事が目にとまった。新聞に目を通すのは長年の日課。今も毎朝、社会面から国際、政治、隅々まで読んでいます。そのころ、今なお続くシリアの内戦は混乱を極め、幼い子ども
の犠牲が連日報じられていた。

「ほんと胸がつぶれるようでね。なんとかならんかな、戦争はなくなるもんかなってつくづく思っ
てね。そうだ、わたしの夢はそれやなって。」

思い出すのは結婚してすぐに移り住んだ沼津で体験した空襲だ。昭和20年7月の「沼津大空襲」では市街地の9割が焼失、274人の死者を出した。

「向こうに見える香貫山に焼夷弾がね、一列に落ちていくの。きつねの嫁入りみたいだなあって。すぐにはっと気づいてうろたえて。」長女を背負って火の降る中、毛布一枚をかぶって防空壕へ走った。普段使われていない防空壕は水びたしだった。入りきれないくらいの人。みな立ったまま夜を明かした。

「朝になって外に出ると一面の焼け野原。なんにもない。まだところどころ火が残っていてね。本当に何もなくなってしまった。」自分の知る戦争についても語らなくてはと思った。

そして迎えた「夢の発表会」。松村さんは最優秀賞を獲得し、発表内容をもとに「私の夢は世界平和」が作られた。幼子を抱えた母親が直面した戦争と戦後の暮らし。体験した人だけが表現できるリアリティに胸を突かれる。そして現在の国際情勢を憂い、戦争のない世界を願う気持ちが綿々と綴られている。

これまで家族にも戦争について語ることはなかったという。忘れたわけでも、決意して口を閉ざしたわけでもない。しかし終戦と同時に追われるように移り住んだ長野で、物のない時代をどうにかこうにかくぐりぬけ、長女に続き4人の男の子を育てた日々。世の中は大きく変わっていく。戦後教育を受けた子どもたちが成人し、それぞれの家庭を築く。その時々々の生活に真摯に向き合いつづけてきたからこそ、それはなかなか語られることがなかったのだと感じた。

戦後一度だけ沼津を訪れたことがあるそうだ。

「一人で行ったから迷ったらいけないと思って。すぐ帰りましたけど。」

全く様子が変わってしまった町並みに驚いて、駅周辺を眺めただけだった。今でも沼津と聞くと懐かしいという。大変な目に遭った土地だが、優しかった大家さんや新婚当時のできごとがよみがえる。

冊子には子どもたち、孫たちに囲まれる松村さんの写真が掲載されている。

「これはね、孫の結婚式。今はひ孫も入れて32人。2人が32人になったんです。それで子どもたちが一人も欠けずにみんな元気。私たちの時代はね、こんなことなかなかありません。本当にありがたい。こんなに幸せになれるなんて思わなかったです。」

なればこそ、平和を、戦争のない世界を願わずにはいられない。興味深い話に引き込まれ、あっというまに時間が経ってしまった。自分はおしゃべりだからと笑う松村さん。今も集会等で求められ、人前で話すことも多いそうだ。人がこころよく耳を傾けられるように話すというのは誰にでもできることではない。よどみない語り口に明るい人柄、長年積み上げてきた経験があればこそ。それは同時に元気の秘訣でもあるだろう。貴重なお話を直接聞く機会を得られたことに心から感謝したい。



「私の夢は世界平和」A5版36ページ。
株式会社マエカワケアサービス
電話046(874)4970